
時雨先生と猫。

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時雨先生と猫。

【Nコード】

N4769H

【作者名】

雨月

【あらすじ】

時雨先生の猫は二尾である。二尾だからフタマタ同好会に入っているんでしょうかねえ？ いえいえ、彼はそんなものには入っていません。彼は時雨先生の家でごろごろとまるで猫のように、過ごしているのです。

時雨先生と猫。

「じゃあ僕は仕事に行ってくるからおとなしくしているんだよ？」

「にゃあ」

「よしよし、いい返事だね」

僕は猫だ。飼い主の名前はなんとか時雨。大学だったか高校だったかわからないが先生をしているために時雨先生と呼んでいる。

先生と僕が出会ったのは一年以上前。その当時僕はまだ見た目が子猫で先生は特に理由があって僕を飼った訳ではなさそうだったがこの前『大きくなったら食べようかなって思ってる』と笑いながら言っているのをみて本気で出て行こうかなと考えたこともあった。

先生が学校に行っている間当然ながら僕がこの家を守る役割に就いている。たまに鍵をかけ忘れて行ったりするのでしょうがなく僕がカギをかけている。

そしてそんなある日、事件が起こった。

そう、先生不在の日に泥棒さんがやってきたのだった。

がたがたという音に気がついて炬燵から這い出て音の主のもとへ

と向かう。雨が降っていて、時刻はちょうど九時頃、てっきり時雨先生が何か忘れものをしてとりに戻ってきたのかと思ったのだが違った。

カー〇のおじさんみたいなひげを生やしたやつが玄関から堂々と入ってきやがった。

『やべっ！絶対あれ泥棒じゃなかよ！？仕方ねえ、変身して僕が何とかしないと』

そこらへんの猫と僕が違う。

尻尾が二尾のためか変身できるのだ！井戸端会議なんてしている猫の中に僕のような二尾はおらず、そのおかげで村八分状態。猫からも二尾ある猫は気持ち悪いだのと言われたりしているのでもはやひきこもり状態だがたまに変身して出歩いたりしている。最も、変身できるのはよく見ている人だけ、つまり僕が変身できるのは時雨先生ただ一人ということになってしまっただけ。

しかし、変身した時の能力はどうやらその人の能力と同等になっってしまうため若干ひ弱そうな時雨先生になったところでもるでボブ・サ〇プみたいな体格の泥棒に敵うわけがない。

つまり、頭で勝負するしかないのだ。

「変身！」

ここに、僕と泥棒さんの対決が始まったのである。

僕はげた箱できよろきよろとしている泥棒の前に立った。もちろん

ん相手は驚いたような表情をするがこちらはあくまでにこやかに笑うだけ。

「お待ちしていました。この雨の中大変だったでしょう？ ささ、どうぞ入ってください。いまタオルを持ってきましたので」

「え？ ええ、すみません」

よしよし、驚いてる驚いてる。まずはイニシアチブを掌握しなくてはいけない。

応接間へとおしてバスタオルを渡す。少しびくつきながらもそのタオルで濡れている体を拭いてもらう。その間にお茶を準備して持ってくる。僕の中でのあらすじはちやくちやくと現実へとなっている。

「それで、うちの地下にある巨大ロボットの研究のために今日は来てくださったんですね？」

「え？」

ものすごく驚いた表情になってるぞ、この人。心の中では笑いながらもそういったひよ上は一切出してはいけない。僕はまじめな顔でひそひそ声で続ける。

「わざわざ匿名情報を流した甲斐がありましたよ。お話ではお昼少し前に来ると聞いていましたがこのように早くきてもらえたなんて光栄です」

「あ、気が変りまして」

どうやらこの茶番劇に付き合ってくれらるようで僕としてはほっとしている。だが、そろそろ追い出す作業にかからないといけない。適当に地下に巨大ロボットがあるとかほざいてしまったのだが残念ながらこの家の地下にそんな面白そうな代物はないのだ。

そういうわけで僕は方向性を少し変えることにしてテーブルの上をみて驚くようなしぐさをする。

「あ、すみません、気が利かなくて。茶菓子を出すのをすっかり忘れていました」

「え？ あ、いえいえ、結構ですので」

「いえ、そういうわけにもいきませんから」

そういつて立ち上がってせんべいを取りに向かう。少し気が變つて先生の書齋に入って茶封筒と一万円札、そして手紙に手短に文を書く。

そこでそのまま悲鳴を上げる。

「うわあっ!!警察だっ!!」

もちろんこの声はあの泥棒さんにも聞こえているだろうし、僕はあの人逃げる前に急いで戻る。

「け、警察ですって!」

「え、ええ、近隣の家に入りにいまして、どうやら嗅ぎつけられてしまったようでして、うちはこのほかにもいろいろとひとさまには言えないことをしているんです。とりあえず今日は顔合わせとということでこれを、これをもって逃げてください」

茶封筒を押し付け、傘とタオルを渡して玄関から泥棒さんを押した。

雨の中必死になって荷が出していった泥棒さんは素人のように見えただった。

「ただいま、今日は何か変わったことが起こったかい？」

「にゃあは」

「はは、そうかそうか」

この人わかってそんなことを言っているのだろうかと思ったが僕は黙っておいた。ま、あの泥棒さんがこの家にやってくることはないだろう、たぶん。

「まったく、あの家の主人には気をつけておかねえと、いや、今度お礼をしにいったほうがいいな」

時雨宅から逃げ出した泥棒は茶封筒の中身と手紙を見ながらため息をついていた。

「『これでおいしいものでも食べてください』って知っててあんな芝居をうったわけだな、まったく、世の中捨てたものじゃねえな」

その後、この泥棒が心を入れ替えて時雨にあいさつに來たのだが彼は当然それを覚えていなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4769h/>

時雨先生と猫。

2010年10月8日14時51分発行